

禪と淨土

——廬山慧遠とその宗教体験——

中 山 正 晃

一 漢代以後あい並んで北地の仏教界の二大思潮を形成した安世高系統と支婁迦讖系統の禪思想は、三国時代に入つて江南へも伝播したが、安世高系の小乗禪は、のちに道家の思想と結びついて、神靈の不滅・神秘的な体験としての禪定の重視、あるいは神通力に対する期待など、この系統の独特の禪思想を形成した。これに対して支婁迦讖系統の大乗禪は、むしろ老莊玄学との関係において、禪定よりも般若を重視し、畢竟空の立場から心靈の實在を否定し、安世高系統の禪と種々の面で性格を異にしている。

かつて道安とその門下は、河北及び襄陽において安世高系の小乗仏典に導かれた禪觀を實踐すると共に、大乘般若教学の研究に努め、両者をそのまま矛盾しない一つの仏陀の教説として受容し理解していたことが道安の遺文によつて知られる。それゆえかつては襄陽にあつて、空なる般若智による悟りの境地こそ、中国の教を超える究極の道であると確信し、

道安の般若經の講義に感激して廻心した慧遠は、のちに廬山の東林寺に禪觀道場をもうけ、衆を率いて昏曉つねに行道を怠らなかつたと伝えられるのは、禪觀の實踐こそ般若体得の道であると強調した道安仏教を継承するものであつた。

すでに道安は「人本欲生經序」の中で、「道は禪と智に従つて得られ、修禪によつて泥洹に近づくを得る」との經説を信じたので、この禪と智を兼ねるという思想が慧遠にも受けつがれ、たとえば「念仏三昧詩集序」に、「氣が虚となれば、智はその照を安静にする」と言い、「修行方便禪經統序」では、「禪は智が伴わなければ、その寂さを窮することができず、智は禪が伴わなければ、その照を深くすることはできない」と言つて、禪と智との相依關係を明確に規定している。かつては道安に師事し、のちに羅什の門人となつた僧叡が、慧遠と同じく禪定と智慧との相依關係を強調したのも、道安の思想的影響によるものと思われるが、僧叡のちに羅什の伝え

た菩薩禪を唱えて、徹底した大乘主義を主張した。これに対して廬山の慧遠は、大乘と小乗を同一視して、安世高系の禪思想が形成した神異な信仰を受容すると共に、自己の主體的欲求から、大乘禪たる般舟念仏をすすめ、見仏往生の弥陀信仰を提唱した。今はこのような慧遠の主體的な思想と行動が、方外的沙門として、時の権力者に抵抗し、自からの思索と実践を通して体得された宗教体験において、どのようなかたまりを示したかを明らかにするものである。

二 師道安の思想的影響によつて安世高系の禪思想に対して終生深い関心をもつた慧遠は、太元十六年(三九一)罽賓の僧伽提婆が廬山に来るや、請うて法勝の阿毘曇心論や三法度論を訳出せしめ、自己はもとより門人達にも阿毘曇学の研究を奨励した。これによつて江南の建康では提婆の阿毘曇を以て仏教の極致を説くもの、これに対して無生方等の経論こそ魔書であると極言するものさえ生ずるほどであつた。ただし三報論は、その副題に「世俗の人が善惡の行為に明らかな応報の驗証がないと疑うのに因つて作つた論」とあるように、慧遠が戴逵をはじめ当時の一般の人々に対して、阿毘曇の説く因果応報説を明示したものであつた。これによれば報には現報・生報・後報の三種がある。そもそも報を受けるのは必ず心であつて、心が外物に感応してはたらくのであり、心のほかに定まつた主体や仕事があるわけではない。それゆえ三

報の世界、業報の世界は、沙門の修道により悟りの境地に達すれば直にたち切られるもので、宿世の殃がいかに積み重なつていても、迷界を脱しているが故に、その殃は自然に消滅して三報を受けることがないと主張する。このような教によつてこれら世俗の人々は、三世応報の道理や輪廻転生の教説を信ずるようになり、その恐れと驚きとによつて弥陀の浄土を願生するに至つたと考えられるのである。

もとより慧遠といえども道安や僧叡と同じく、早くから般若学に多大の関心と深い造詣をもつたのは、襄陽時代で終るものではなかつた。梁高僧伝(卷六)によると、慧遠は中国に未だ泥洹常住の説がなく、ただ寿命長遠というにすぎないのをなげき、法性論を著わして、究極至上の道(至極)は、常住不变を本性とすることを説いて、のちに羅什の絶讃を受けたことを伝えている。

思うにこの法性論は、慧遠が羅什と交渉をもちながら、まだ大品般若経を得る前の作とも考えられるが、その後ますます長安の仏教界と交渉を重ねるようになったとはいへ、慧遠が性空(法性)の真の意味を羅什の言う畢竟空まで理解し得たか否かは疑問の残るところである。嘗て僧叡は「毘摩羅詰提經疏序」において、それ以前の中国には識神性空の明言するものが少なく、存神の文が多いことを述べ、また王稚遠(王謐)は羅什に対して「泥洹に神ありや否や」と問うたことが

陸澄の法論目錄にみえている。それほど神のない泥洹ということは、当時の中国人士にとつては考えられないことであつた。それゆゑ慧遠は、沙門不敬王者論（第五）に、宗極は神の内容であり、不滅の神を主体とすること、神の不滅であることが仏教の実在、すなわち宗極の不変不窮を意味することであつて、このような境地を泥洹とか法性とか言う語で理解したわけである。

ところで震主の威を誇る世俗の桓玄と隱逸方外の實をもつて任ずる沙門の慧遠との交渉は、言わば儒道思想と性空思想との対決の問題を提起したものである。これに対する慧遠の宗教的立場は、世俗と沙門とを峻別して、自己の生を否定して宗極を求める方外的な沙門の仏教は、世俗の礼教を超えるものであり、したがつて国家権力と原理を異にするというものであつた。桓玄の発した沙門淘汰の教令をめぐる慧遠との論難往復は、のちに儒教と仏教とは世俗に処ると世俗を超越するとのちがひはあつても、終期を同じくするとの妥協点に達したが、元興元年（四〇二）秋、般若台の阿弥陀仏像前にいて、慧遠らが立誓した西方往生と念仏三昧の実践は、さきの業報の必然や超越的な不滅の神に対する強固な信念にもとづいて行なわれたものである。

三 現存の念仏三昧詩集序は、西方願生者としての慧遠が、般舟三昧経にもとづく念仏三昧による見仏の法につい

て、自からの実践体験のもようを述べたものである。これによると、まず三昧とは、思いを專一にし、想を寂めることを言う。思いが專一であると、志は一に集中して分散せず、想が寂かであると、気は虚となり、精神は澄みわたつてくる。気が虚となれば、智はその照を安静にし、精神が澄みわたれば、如何なる幽微な道理にも透徹する。この二者（気が虚となり、精神が澄みわたること）は、人為をこえた自然の玄妙な符であり、両者が相合してはたらきを成すものである。このような三昧（定）を得る最も有効な方法として、未だ般若智に達し得ない人々が、西方淨土に現在する阿弥陀仏を心に専注し想念するのであるが、それは諸三昧の中ですぐれた功德もち、実行しやすい念仏であるとする。そのわけは神を体得した仏が姿を変えて、衆生に応じ現われるのに、一定の仕方によらない。それゆゑこの定（念仏三昧）に入る者は、昧然として分別知を忘れ、阿弥陀仏の色身を現見しつつ、靈妙な精神のはたらきを現するわけである。このような念仏三昧において、ひとたび仏を見て得た感悟は、久しく自己を束縛していた煩惱を断除すると言うのである。これによつて仏法を信ずる人々は、みな共に念仏三昧による見仏のひとしき契りを得ようと思ひ、法堂に集つて心を洗い清め、襟を正して清らかな氣持で仏影に向かい、早朝から夜おそくまで念仏三昧を修するよう策励したものである。

四 慧遠と羅什との間に交わされた十八条に亘る大乘要義に関する問答が主に不滅の仏(法身)の問題に集中しているのは、廬山の念仏三昧が神秘的な見仏の体験を目標としたからであり、その点で仏の法身の問題は、見仏三昧と密接な関係をもつものである。これは言わば小乗阿毘曇の考え方に立ち、色身の見仏を目標としてきた慧遠の念仏にとつて、生滅去来のない法身仏がどうして見仏の対象になるのか、また衆生への応現教化、説法の主体として法身仏にいかなる成立条件があるかを質ねたものであつた。

この法身に関する前後八回に及ぶ羅什との問答において、慧遠は(一)大乘の法では法身とは実相であつて、生滅去来なく、泥洹と同じであること(二)法身は衆生に応現する変化と同じで、四大五根はなく、水に映つた月や鏡に映つた像のようなものであること(三)法性から生まれた身が眞の法身であつて、恰も太陽の出ているように永久不変であると領解している。

然らばこうした仏身の実相の立場から、般舟三昧による見仏について、その定中所見の仏をいかに理解すべきかを問うたのが「次問念仏三昧并答」であつた。ただし慧遠の胸中には般舟三昧経が定中見仏の条件として挙げている持戒無犯・大功德・仏威神の三事に対する確信があるので、仏の威神が自己の幻想でなく、外から加被されたものであれば、定中の見仏を幻想的な夢に喩えるべきではないとの所信を述べたも

のである。これに対する羅什の解答は、見仏三昧には三種の定(念仏三昧)があり、その内容は同じでないことを説いて、般舟三昧を凡夫の境界である憶想分別の限界内にあるものとし、ただ念仏を学習する功によつて見仏できるのであつて、菩薩が般若波羅蜜によつて神通力をもち、見仏開法する功德とは内容的に異なることを指摘したわけである。これによつて慧遠は念仏三昧による見仏は虚妄でないとの確信を得たものと思われる。

五 廬山の般若台精舎において、念仏三昧による見仏開法を期し、羅什との間にも仏の不滅の法身とその帰依者への応現教化について、熱心な質疑を繰返してきた慧遠は、晩年には仏影窟における感応靈験に感動し、定中見仏を期して般舟三昧を修したものと思われる。義熙九年(四一三)に作つた仏影銘には、自から過去の修道生活を反省した結果、発憤して寢食を忘れ、情にそのなびきを益々深くし、閑かな夜に慮を静めているところ、なるほどと思ひあたるところがあつたと述懐しているところは、慧遠の神秘的な宗教体験の世界を物語つていると思われるが、またこれによつて法身の靈妙な感応による見仏こそ、仏教の真実在を証明しうる所以であるとの確信をもつて、定中見仏のために般舟三昧を実修することを信仰者に勧めたところに慧遠の宗教的態度が窺われるのである。

(竜谷大学助教授)